

第十八回 齋藤茂吉短歌文学賞

花山 多佳子 『木香薔薇』

砂子屋書房

選考委員

委員長 岡井 隆

委員 小池 光

永田 和宏

馬場 あき子

(五十音順)

花山多佳子

『木香薔薇』もくかうばら

(自選十首)

葉の落ちてたちまち点とちる満天星どうだんのくれなるの芽よ 遠き春まで

草木さいもくの忘れ去られし果てにして草木のみの朝は来るべし

裂けて立つ木の名は知らずうらうらと木香薔薇の花のなだるる

大根を探しにゆけば大根は夜の電柱に立てかけてあり

はかなきははかなきままにとどまりて睦月のそらの白き雲はも

摘まれたることを知らざるひるがほが夕べの卓に花閉ぢてをり

まつしろいペンキのやうな鳥の糞に飛び立つときの勢ひがあり

夕空に高く帽子を投げ上げよ蝙蝠がつられて落ちてくるゆゑ

つぎつぎに「おじやましました」と言ふ声の聞こえて息子もゐなくなりたり

なぜかみな青柿のまま落ちてゆく 母亡き家のこの柿の木は

独自の批評眼の光る作品集

岡井 隆

花山多佳子氏の『木香薔薇』は、なにげない日常生活の断片を歌った、わかりやすい作品集です。しかし、いたるところに作者独特の批評眼が光っています。二〇〇二年から二〇〇五年までの歌、作者五十四歳より五十七歳の作品です。年齢的には歌歴の上でも熟成の境地にあります。家族を含めた身辺の小さな出来事が、一見ユーモラスに描きとられたりしますが、その底には憂愁があり、現代への批判があります。短歌の技巧の上でも、巧みであり、完成の域にあるといえます。選考委員が一致してこれを推したのも、当然かと思われれます。

生のリアリテイ

小池 光

花山多佳子氏の歌集『木香薔薇』は日常生活の何げない場面場面を切り取りながらその都度鋭利に事態の核心を衝いて、時に切なく、時にユーモラスに、読者を飽きさせない魅力に富んだ世界を短歌の形式に刻み込んでいます。直観力のたしかさと表現力のたしかさがよく調和協調して、花山氏のこれまでの歌境をさらに進めただけでなく、短歌の現代的達成をあざやかに示すものになっています。一首一首からにじみ出る、生のリアリテイにまぎれがない。いかにもわたしたちは現代をこのように切なく、うらがなしく、愚かしく生きており、また生きることを余儀なくされているとおもふ。充実した一冊を受賞歌集に選ぶ事ができることをふかくよろこぶ。

花山さんの受賞を喜ぶ

永田 和宏

花山多佳子の『木香薔薇』に歌われる家族像には、どこか四コマ漫画を見ているような、途方もない可笑しさがある。

わが眉毛すぐ抜きたがる娘あて夜ふり向いたときが危ない
疲れてるのがすぐわかるよと言ふけれどお前のせいで不機嫌なだけ

日本中八十円切手で行くのかと訊きて息子の電話切れたり

どれも「ホントか!」というような可笑しさだが、どの歌にも紛れもないリアリテイがあつて、そういえばそんなことは我が家でもあるよな、と思わせるところがある。この線をもう少し越えてしまうと過剰になってしまう危うさもあるが、ともあれ、ここに描かれている子供たちは、花山作品のなかで二十年以上もその成長につきあつてきた。親しい友人として、この歌集の受賞を喜びたい。

今日の生の真をうがつ

馬場 あき子

花山さんの歌は面白味は濃いですが、半面咀嚼しにくい渋味をもっているのが特色である。どこかに独特の哲学があり、思索があつて油断ならない。「豌豆の莢とり終へて永遠に為すべきことのあらざるごとし」というような卑近の作業から老子が出てきそうな気配があるかと思えば、「大根を探しにゆけば大根は夜の電柱に立てかけてあり」という奇抜な可笑味がとび出してくる。また今日的な文明社会の人間の日常の一齣を、「陽に暗くにんげんの顔流れ来たりわが居る電車のドアの前に」と無気味な異相として捉えてみせる。まことにその不安や、可笑味や、醒めたリアリテイは今日の生の真をうがつものである。

受賞の言葉

花山 多佳子

いつごろからか、歌をつくる前にまず茂吉の歌集を開くようになった。といっても原本ではなく、私の持っているのは昭和二十九年発行の「齋藤茂吉全集」の一々六巻に収録されているもので、粗い布ばかりと、薄くつるつるして茶ばんだ紙面の指ざわりが気に入っている。これをアトランダムにひらいて読むのが、歌をつくるときの儀式のようになっていく。一つには茂吉の声調が好きなので、この調べが入ってくる、ようやく一首をつくる気分になれる。一つは歌の振幅の大きさ、多様さによって、こんな歌にもなる、という解放感を与えてくれる。むしろ、茂吉という人間が背後にあつての歌なのであるが、こういう人間が短歌の歴史に存在したということが、短歌を続ける上での拠りどころになってきたように思われるのである。

思いがけなく、最も好きな歌人である茂吉の名前を冠した賞をいただいて、ほんとうにうれしい。身に余る賞に選んでくださった選考委員の方々、推薦してくださった方々に厚くお礼申し上げます。ありがとうございます。



第18回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

花山 多佳子 (はなやま たかこ)

歌人。1948年(昭和23年)東京都武蔵野市生まれ(59歳)。

千葉県柏市在住。

同志社大学文学部文化学科卒。在学中に「塔」入会。

1978年(昭和53年)、第1歌集「樹の下の椅子」を出版。

「塔」選者。河北新報「河北歌壇」選者。

歌集

「空合」

「楢円の実」

「草舟」

「春疾風」

受賞歴

平成6年「草舟」 第2回ながらみ現代短歌賞

平成11年「空合」 第9回河野愛子賞

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房
- 第二回 本林勝夫 『齋藤茂吉の研究—その生と表現—』 桜楓社
- 第三回 塚本邦雄 『黄金律』 花曜社
- 第四回 前登志夫 『鳥獸蟲魚』 小澤書店
- 第五回 斎藤 史 『秋天瑠璃』 不識書院
- 第六回 近藤芳美 『希求』 砂子屋書房
- 第七回 小暮政次 『暫紅新集』 短歌新聞社
- 第八回 馬場あき子 『飛種』 短歌研究社
- 第九回 吉田 漱 『白き山』 全注釈』 短歌新聞社
- 第十回 佐佐木幸綱 『吞牛』 本阿弥書店
- 第十一回 伊藤 博 『萬葉集釋注』 集英社
- 第十二回 森岡貞香 『夏至』 砂子屋書房
- 第十三回 竹山 広 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房
- 第十四回 藤岡武雄 『書簡にみる斎藤茂吉』 短歌新聞社
- 第十五回 清水房雄 『獨孤意尚吟』 不識書院
- 第十六回 小池 光 『滴滴集』 短歌研究社
- 第十七回 三枝昂之 『昭和短歌の精神史』 本阿弥書店

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇一八五七〇

山形市松波二丁目八一― 山形県文化環境部県民文化課内
TEL・〇二三―六三〇―二九〇三